

(平成29年度吉岡博人記念  
総合医学研究奨励賞受賞グループ研究発表)積極的摘  
出を施行した神経膠芽腫に関する早期再発例の網羅  
的遺伝子解析と臨床病理学的検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 郡山, 峻一, 村垣, 善浩, 生田, 聡子, 福井, 敦, 川俣, 貴一, 丸山, 隆志, 新田, 雅之, 岡本, 沙織, 三谷, 昌平, 赤川, 浩之 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10470/00032378">http://hdl.handle.net/10470/00032378</a>

工神経による IPJG が動物実験レベルで可能であることを世界で初めて報告した。そしてさらに現在臨床使用されている PGA 製人工神経と皮下脂肪組織を酵素処理、継代培養して作成した脂肪由来幹細胞 (ADSCs) を組み合わせ「ADSCs ハイブリッド型人工神経」を用いた IPJG をラット顔面神経不全麻痺モデルで行った。またその治療効果を自家神経移植による IPJG と組織学的、生理学的に比較検討し、臨床応用可能な顔面神経不全麻痺治療となり得るかを評価したので報告する。

## 2. 積極的摘出を施行した神経膠芽腫に関する早期再発例の網羅的遺伝子解析と臨床病理学的検討

(東京女子医科大学<sup>1</sup>先端生命医科学研究所先端工学外科学,<sup>2</sup>先端生命医科学研究所,<sup>3</sup>脳神経外科学,<sup>4</sup>統合医科学研究所) 郡山峻一<sup>1</sup>・村垣善浩<sup>2</sup>・生田聡子<sup>2</sup>・福井 敦<sup>1</sup>・川俣貴一<sup>3</sup>・丸山隆志<sup>3</sup>・新田雅之<sup>3</sup>・岡本沙織<sup>3</sup>・三谷昌平<sup>3</sup>・赤川浩之<sup>4</sup>

神経膠芽腫は、WHO (世界保健機関) が定めた判定基準で最も悪性度が高いグレード 4 に分類され、集学的治療にも関わらず未だ予後の悪い脳腫瘍である。近年、様々な悪性新生物における遺伝子異常の理解が進み、これを受けて 2016 年の改訂 WHO 脳腫瘍病理分類では既知の遺伝子異常に基づく分子遺伝学的分類が大きく取り入れられることとなった。遺伝子解析技術の進歩により、今後さらに、予後や治療反応性等に係る分子基盤についての知見が深まることが期待されている。本研究では、本学にて積極的摘出を施行した神経膠芽腫患者を対象に網羅的遺伝子解析を行い、早期再発例あるいは長期生存例を特徴付けるような分子遺伝学的プロファイルの検索を行った。本学にて 2006 年 9 月から 2012 年 8 月の間に摘出術を施行した 18 歳以上の神経膠芽腫患者のうち、術前後の MRI 画像解析により 95% 以上の摘出率であった患者 31 例を対象とし、SNP アレイによるゲノムワイドなコピー数異常解析を行った。さらに、良質な核酸が抽出できたものについては、次世代シーケンサーによる RNA シーケンシング解析、全エクソームあるいは主要な癌関連遺伝子についてのターゲット・リシーケンシング解析も実施した。これらの網羅的データを統合解析することにより、神経膠芽腫をいくつかの階層に分類することができた。臨床像との相関についての検証も加えたのでデータとともに供覧する。

## シンポジウム

### 「輝く女性が未来を創る 女性医療の最前線」

#### 1. 男性とは異なる女性への診療：性差医療が果たす役割

(東京女子医科大学 総合診療科, 女性センター 女性内科) 片井みゆき

性差医学・医療 (Gender Medicine) は、生殖器系のみならず男女共通の疾患でも、病態や治療法において生物学的・社会的な性差を考慮する医学・医療である。日本では 1999 年に概念が広く紹介され、2001 年に性差医学に基づく女性専用 (専門) 外来が誕生した。

東京女子医科大学は 2007 年に日本初の「性差医療部」を東医療センターに開設し、「女性専門外来」として女性のさまざまな愁訴に対応するため 13 専門分野の女性医師が連携し各専門性を活かした診療を行って来た。全国 400 か所以上に開設された女性専門外来の中で、本学の女性専門外来は医師数・受診者数ともに最大規模で、多数のメディア報道も影響し、全国各地や海外からも受診者が訪れた。その後、2017 年からは本院に統合、2018 年には女性科が発足し、2019 年には女性センターとして新たな形の発展を遂げている。

性差医学の進歩により、女性では生活習慣病を含めさまざまな全身疾患の発症に、ライフステージに伴う女性ホルモン分泌の劇的な変化が関与することがわかって来た。女性医療においても、性差を考慮した対応、診療科の垣根を越えた総合的な診療には国民からのニーズが高く、近年は内閣府や都道府県の女性の健康増進計画に「性差医療」、「女性の健康の包括的支援」という文言が明記され、その実現は国家レベルでの今後の目標とされている<sup>1,2)</sup>。

本学は今日まで全国に先駆けて女性の包括的診療をリードして来た存在であり、モデルケースとして、これまでの経験を従来の医療や今後の国の施策へ還元していくことが望ましいと考える。国が掲げる女性の健康の包括的支援は、各分野において全国で最多の女性専門医が在職する本学だからこそ、本学のアドバンテージが最大限に生きる取り組みと言える。本シンポジウムで、本学の性差医療で得られた知見の一部を紹介させて頂きたい。

1. 内閣府男女共同参画局：第 4 節 性差に応じた健康支援の推進。「男女共同参画白書 平成 25 年版」[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/honpen/b2\\_s11\\_04.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h25/zentai/html/honpen/b2_s11_04.html) (accessed July 16, 2019)
2. 東京都：生涯を通じた男女の健康支援。「東京都男女平等参画推進総合計画 I 東京都女性活躍推進計画 平成 29 年 3 月」pp 143-154 (2017)